

連載

# あぁ、猪猟泣き笑い

## その15年を振り返り

川崎市

田宮 治

色んなことがありました：



### ④ 実猟犬作りに必要なこと

#### ● 継続は力なり

昔から狩猟の世界では「一銃一狗」と言われているが、これこそ「人犬一体」の、実猟における最高技術、究極の猟犬芸を指していると思う。まさに「名人」あつての「名犬」と言えよう。

名犬における猟芸であるが、「鳴き止め」がベストと言われているのは、「1頭で大猪を止められるのは、鳴き止め犬だ」ということだ。いずれにしても、1頭で大猪が止められるのなら、その犬が何百万円しようと、価格など問題ではない。私のように、実猟のために3時間もかけて猟場に出かけたり、犬群の移動や、日常の何十頭もの犬の世話や餌代を考えると、価格などつけられるものではない。

1頭の「名犬」で済むのであれば、都市部で犬を飼うこともできるだろうし、費用なども少なくて済み、まさに良いこと尽くめである。現実には、そのような「名犬」が何頭も居たこと(現在も居ること)は、本誌にも記述されているが、1頭の「名犬」を持つことは、真に猟人の理想であり夢でもある。しかし、よく考えてほしい。これらの「名犬」を本誌に紹介して

いる先達は、当然のことながら猟界では名を残した「名人」達である。その並外れた「名人」が寝食を忘れ、膨大な経費と、気の遠くなるような時をかけて、ただひたすら「名犬」作りに挑み続け、やつと作り上げたのである。私など凡人の遠く及ばない足跡がそこにはある。

それゆえ、「名人」と呼ばれる人達の言動には、読む人聞く人を納得させる力があり、その一言一句は、未来へ伝え続ける価値があると思う。先達の教えは、単に「紙上の名言」などでない。実猟で失敗を重ね、その失敗をバネにして成功を導き出し、子犬作りや猟犬の訓練に全財産を投げ出し、生涯を懸けて成しえた偉業なのだ。

だからこそ、その理に適った「猟犬作り」や「猟法」は、読む人を虜にする力があるので、たやすく「名人」や「名犬」ができるのではなく、そこにも居た、ここにも居る……といった軽いものでは決してないことを肝に銘じてほしい。

まだまだ未熟な私だが、先達から学んだ多くのことをしっかりと受け止め、それらを教訓として現実を目を向けていこうと考えている。「名犬」作りは、すぐには難しいと

思うが、まずは自分にできる「実  
猟犬」作りから始めてみたいと思  
っている。

私の持論だが、「良い猟犬さえ  
持てれば、誰でもイノシシは獲れ  
る」と思っている。そして、「イ  
ノシシを撃ち獲る」という経験の  
積み重ねの先に、「名人」「名犬」  
が見えてくる。言い換えれば、粘  
り強く挑み続ける：以外に近道は  
ないのである。何事においても、  
「挑み続ける」ことは、「継続は力  
なり」で、これに勝る上達方法も  
手段もない。

素晴らしい猟犬群の完成。それ  
らを引き連れての単独猟。夢がふ  
くらむが、それらを実現させるた  
めには、猟犬作りのための「訓練」  
を重ねると同時に、その基になる  
良い血を持つ「子犬作り」が決め  
手になる。訓練であれ、子犬作り  
であれ、まず目標を立て、自信を  
持つて、自分の好きな方法でやっ  
てみるのが一番よいと思う。

「仕事が教える」という言葉が  
あるが、これは昔、農作業などを  
手伝っていた折に、父母からよく  
言われたことである。誰から教え  
られなくても、一生懸命仕事をし  
ていれば、その中で、どうすれば  
効率よく仕事がこなせるかが見え

てくる：という大切な教えたった。

例え素人でも、一心に励んでい  
れば、いつしか無駄を省くことを  
覚え、有効かつ最短に仕事を完成  
させる技術や方法を学ぶ。そして、  
その積み重ねの先には、その道の  
達人、つまり「プロ」が生まれる  
ことになる。自分を信じ、わが道  
を歩み続ければ、やがて自分の好  
む猟芸の犬を手にし、自分流の猟  
技も極められるはずだ。

失敗や成功の繰り返しの中から、  
苦しんでつかんだものは、我流で  
あろうと、必ず人を唸らせるよう  
な「猟犬」なり「獵人芸」が完成  
すると確信する。言うまでもなく、  
例え素人でも、何年もかかって苦  
労の末に極めたからこそ、「達人」  
とか「プロ」と呼ばれるようにな  
るのである。「達人」とて、何年  
か前には私と変わらぬ素人だった  
のである。

どうか諦めずに、あなたなりの  
猟道を極めてほしい。そして、素  
晴らしい「芸」に関しては、「犬」  
であれ「獵人」であれ、「すごい！」  
と素直な気持ちで認められる：そ  
んな獵人になってほしいし、私自  
身もそうありたいと思っている。

付け加えるならば、優れた獵芸  
の犬は、何頭もの中から出るので

あり、ただ1頭と決めて飼育・訓  
練しても、「名犬」にするのは困  
難である。普通、犬は「群れる」  
ことを得意とするので、どちらか  
と言えば犬群で鍛えたほうが素晴  
らしい芸をする1頭になると思う。

私は、獵芸の優劣は別として、  
基本的には猪犬は簡単にできる：  
と思っている。獵人が心して取り  
組めば、必ず素晴らしい獵芸の愛  
犬を獵野で引き、心に残る楽しい  
猟ができると確信している。

実獵において、例え1頭のイノ  
シシでも、愛犬(達)と自分の力で  
撃ち獲ることができたなら、そこ  
には天下晴れての「名人」(当然、  
自己満足の中で)がいて、その横  
には一流芸の「名犬」(主人の思い  
込みで)がいることを実感できる  
だろう。それでいい、それでよい  
と思う。まさに、「継続は力なり」  
である。

### ●訓練も「実獵の場」が一番

獵犬の訓練は、優れた獵芸の完  
成には欠かすことができない。愛  
犬を大猪でも完全に止められる一  
流芸にするためにも、また、どん  
な荒猪との攻防でも受傷しないよ  
うにするためにも、「起こし」か  
ら「追跡」→「止める」、または逃

げられて「帰って来る」までの一  
連の獵芸を繰り返し教えることで  
ある。狩獵犬には、このような一  
連の訓練が必要であり、これらを  
全てやり遂げられる獵犬だけが実  
獵で使える「猪犬」と言える。

一流芸の獵犬を求める以上、獵  
人ならば「実獵訓練」は最も考え  
なければならぬことであり、苦  
労することでもあるが、避けて通  
れない道である。狩獵の立役者は  
優れた獵犬達であるから、粘り強  
く訓練してほしい。本誌で述べら  
れている名言や、先達の意見を参  
考に、色々な訓練方法を考えると、  
まさに「人それぞれ」で、初心者



鳴き止め犬の「ラン号」(左)と「クマ号」

でなくても迷うところである。私の場合、犬の訓練も「俺流」だった。色々やってみて、失敗を繰り返す中で、たまたま成功したのだと思うが、一軍の猪犬群完成の体験から言うと、まず1頭でよいから、優れた猟芸の「先犬」を作ることである。この1頭が後の一流芸の軍団を作ってくれるのである。

元々犬は、「群れ」での活動を得意とし、先犬が仲間に教えたり指示しているのである。反面、失敗の原因の一番は「主人が迷う」ことである。主人が自分に自信が

ないうちは、きちつと目標が持てない模索の状態であり、一貫した訓練ができていないのである。

人それぞれ、方法は色々あると思うが、その中で自分に合った一番好きなの、そして、続けられる訓練法で突き進むこと。決して迷わず、信念を持って、ひたすらやり通すことである。私は、猟犬の訓練は要点、つまりコツさえ覚えれば、さほど難しいことではないと思っている。私の現在の心境を正直に言ってしまうと、「俺の15年間を返せ！」である。

構えて「イノシシの止め芸」な



今獵期一軍入りの「ミス号」の子「クロ号」(左)と「ゲン号」



大切な「ミス号」のツル。平成17年7月14日生まれ

どと言うから、その訓練法も難しいのであって、具体的な「俺流トラの巻(?)」は、実に簡単に明瞭である。これは、あくまで私が獵期終了後に毎年続けていることであるが、実際に狩ってきた獵場で行うことであり、来獵期に向けての準備でもある。

実は、非獵期に行うこの「山行」こそ、来る獵期につながる大切なことであり、子犬の訓練である。

### ■俺流トラの巻 その①

獵場をよく知ること。いつも追われたイノシシがここを越えるのだが、この裏側はどのようになっているのか。獵期中は岩場で滑りやすく、危険なので諦めていた場所、思わぬ横道があったり、獣道伝いに下りられ、意外と良い沢であったり、良い寝屋場であったりするものだ。こうして狩る獵場つまりホームグラウンドを全て知り尽くすことである。

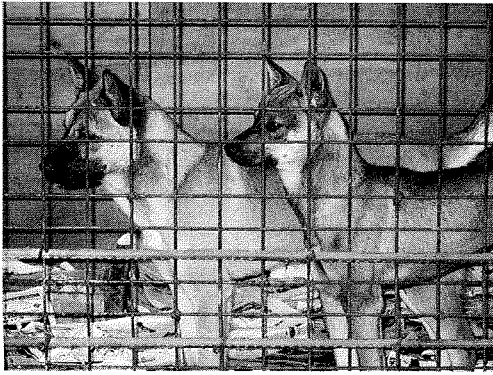
特に出峰周りとか、イノシシの寄りつく場所とか逃れる方向など、詳しく調べ上げておかないことには、先回りすることも攻める対策も立てられない。とにかく、愛犬が鳴き出し止めたら(鳴き止め)、最短でその場に駆けつけられるよ

「富士雄号」(左)×「クマ子号」の組み合わせも平成17年7月14日にできた



うにしておくことである。

振り返ってみると、その失敗の大半は、自分の想像外の所に飛ばれたり、「こんな所に寝ていたのか」というような初歩的な失敗であり、これらは山を知らないために起きている。山を知り、よく考えれば何のことはないのである。イノシシは、いつも行動している一番安全な場所を伝って逃げ延びているだけなのだ。



平成17年度訓練犬。「竜号」(左)と「富士号」



平成17年度訓練犬。「太郎号」(左)と二代目「竜号」

これらのことを学んだり、新規の猟場の開拓もこの時期が一番である。この山には何頭ぐらいイノシシが入っていて、犬をここから掛ければあそこに逃げて、○○で

止まる。沢から攻めればよい、または、峰から攻めるほうがよい：など、狩猟地図を見ながら気楽に歩くことである。

この山歩きのもう一つの楽しみは、イノシシの棲息状況を調べることである。あの出峰に2頭、この沢を登った下草のある林に1頭：などと、来る猟期に備えて手帳にメモするのである。こうしておけば、「猟期1日目は、この山の犬猪をゲット」などと、事前の計画も立てられる。

山を知ることがが猟期を何倍も楽しめることになり、何より猟果に直結することなので、子犬2頭を引連れ、せつせと猟場に足を運んでいる。子犬は、こうして山歩きするだけでも有効な訓練になり、見違えるほど体力もつく。

### ■俺流トラの巻 その②

さて、子犬の訓練であるが、私はわが家の愛犬(特別教育係として「クマ号」「ラン号」「クマ子号」の中から1頭を選び、それに子犬2頭を付けて前記の山歩きをするのである。

この場合の教育係は、ベテラン犬であっても、咬み止め一番ではダメで、「鳴き止め犬」であること

と、主人を中心に狩り込み、絶対に遠くまで追って行かない犬であることが条件となる。なお、その狩り込みも、イノシシがいなければ主人から見える範囲にいる犬に子犬2頭を付けて、気の向くままにいつものコースを歩くのである。この場合でも、基本的には「イノシシがいないうがよい」のだが、イノシシと出合ったときでも、子犬のために鳴いて追いかけるくらいがよく、がつちりと止める一軍のバックには絶対に付けてはいけない。

また、小動物は絶対に追わせてはいけない。私の犬は、全犬がこれを追わないが、猪猟での「ウサギ追い」など、ただけだものではない。いずれにしても、イノシシとの対面は、この時期の子犬にとってはできるだけ避けたほうがよい。それは、銃を持っていないとか、狩猟法などからも言えることだが、本当にイノシシに当てるような無理な教育をする必要がないということである。

子犬の訓練は、主人に付いて先犬と一緒に、上手に山を回ることができるようになることと、子犬の体力をつけること、この2点で十分である。子犬達は山までの道

中で車に乗ることを覚え、車に乗れば楽しい山に行けるといふことを覚える。これも、猟犬として子犬時に教える大切なことである。また、車を止めた場所から放犬する所までと、帰り道は車まで必ず引き綱を付けて訓練することも忘れてはいけない。

子犬との関係は、大局的には「よしよし」と褒めてやることだが、例えば子犬同士でも、ケンカなどのときや、また、他犬や人に吠えつくなど、悪いことをしたときは、その場ですぐに思い切り叱る。その場ですぐ叱ることは、子犬にとっては、なぜ叱られたのかを知ることであり、大切なことである。

これらのことを私が行っているのは、5月の連休までの間の、下草が少なく歩きやすく、登山者も少ない時期である。夏の訓練とか、マムシの出る季節は避けて、まだ緑前の、見慣れた山がひとかさ大きく見えるときに行っているのだが、緑になると山は急に見通しが利かなくなるので、慣れた山でもくれぐれも迷子にならないように気をつけてほしい。

以上が先犬に付けての子犬の初歩訓練だが、先犬がいないう場合でも、基本的には全く同じである。



「サクラ号」(上)と「イチ号」



期待の子「太郎号」(「ブル号」×「クルミ号」)

その場合は、山でなくても河川の岸とか、近くの山道でもかまわない。4〜5カ月の子犬を2カ月ほどかけて行う訓練で、その目的は引き綱から始め、放犬して主人に付いて山や野を回れるようにすることである。

口笛や「来い来い」で、すぐ飛んで帰るようにする。「ハウス」や「乗れ」で、すぐに車に飛び乗る。そんなことの訓練である。車では鳴かないように、また酔わないように訓練する。これらのことを繰り返すことで、確実に教え込んでいく。これらのことさえ仕

込まれていれば、あとは獵期にイノシシを3〜4頭咬ませることで立派な猪犬になる。

一軍の犬群に付いて回ることができ、邪魔にならない程度に仕上がっていけば十分で、イノシシとの攻防を重ねることに素晴らしい猪犬になるはずである。重ねて注意するが、必ず小動物に行こうとするので、すぐに呼び戻し、叱らずに無視すること。

訓練は、イノシシのいない山がよい。良い猪犬の血を引く子犬は、成長すれば必ずイノシシに行くので、焦ることはない。繰り返すが、この時期の訓練は、獵犬の基本となる大切な事柄を確実に教えることと、子犬の体力作りである。

最近、私は子犬と歩くことで、私自身の体力作りにもなり、こうすればもつと良くなる、ああすればどうか…などと、子犬達に教えられることが多いと感じるようになり、もうひとふんばりしてみようかと思っている。

猪猟も獵犬の訓練も、好きでなければ続かないことだが、皆さんにもぜひ頑張ってもらいたいと思う。「案ずるより産むが易し」で、意外と簡単に素晴らしい獵犬ができるかも知れない。

さて、本番前の10月から獵期までは、イノシシのいない山で、実戦の一軍パックを体力の調整とともに、パックでの協調性をきちんと整える訓練を行う。実は、この訓練こそが来る獵期での獵果を決定づけるのに大切なのだ。

一軍入りの若犬の仕上げり具合や、他犬との相性などを全体の流れから注意深く見極めつつ、5〜6回の実戦訓練を行う。「実戦訓練」と言っても、イノシシに合わせる必要は全くなく、パックの犬群が仲良く、すんなりと山回りできることと、休んでいた犬群の体力調整が最重要ポイントになる。実力犬群がイノシシに絡むと、困ったことになるので、くれぐれも注意が必要だ。

### ●訓練所での訓練と 実獵犬の獵芸について

私は、獵犬の訓練についてもそれぞれで、仕上がった獵芸もその人の好みでよいと思っている。訓練の方法も、訓練所でやろうと山で引いて仕上げようと全く自由であり、その人の考え方次第であると思っている。

ただ、訓練の目的が実獵犬としての獵芸の完成のためのものか、

また、全国猪犬大会出場のためのものかなど、その目的によって訓練の場所も訓練方法も大きく変わってくる。当然ながら、主人の考え方や信念も変わる。

私は、「猟犬の芸は、山での実猟の芸をもって論ずるべきである」という信念を持っている。このことを前提に述べさせていたくなく、訓練所はその名のとおり、猪犬訓練のための「道場」である。この道場は、様々な実猟を想定して、その猟芸を磨く場であるが、なにぶんにも「柵の中」であり、限りがある。

イノシシに犬を当て、その攻防を学ばせるには、訓練所での訓練が一番の近道であることは万人の認めるところである。現に私も、かつてはよく通ったものである。柵の中で見た参考犬とイノシシとの攻防は、実に素晴らしいものであり、まるで「牛若丸」のようである。前後、左右に動きながらの止め芸は、まさに「見事」の一語である。

初心者がこれを見て、「すごい」と思うのは実感であろう。自分の犬もあのようになってほしいと、参考犬の虜になって、通いつめることになる。毎日イノシシと対してい

る参考犬と違い、訓練所に通うと言っても限りがあり、「これでよし」と自認できるまでには、かなりの日数と経費がかかる。

訓練所で子犬を2〜3頭仕上げてみて、誰もが実感する第一の問題は「経費」である。第二が、このように素晴らしいイノシシとの攻防が、はたして実猟でもできるか、ということである。言うまでもなく、実猟は険しい山が舞台となり、訓練所の柵の中とは違う。

訓練所では、「始めノ」で犬を放せば、目の前にイノシシがいて、少し追えば柵があるのですぐに止まる。こうした状況の中で、イノシシも犬も毎日同じような攻防を繰り返す。「訓練所のイノシシは山猪より強い」とか「俺の犬は、1頭で大猪を止める」と言っても、止める場所は柵の中であり、山で大猪を止めることは猟芸も異なる。

実猟は、大自然の中で実行され、猟犬の芸はイノシシの「起こし」「寝屋止め」「追跡」「止め芸」、さらに逃げたときには、「帰って来るまでの総合芸」を言う。「猪犬」と言うからには、これらの一つでも欠けていると使いものにならない。さらに、これらに加えて「鳴

き声」や「人畜への安全性」なども条件になる。

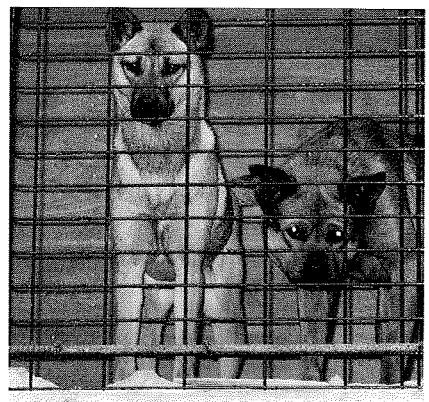
訓練所では、犬が自分の目でイノシシを見て追って止める。そして、そのイノシシとの攻防だけを極めるのが訓練目的である。これが前述の第二の問題であり、欠点と言えるかも知れない。

しかし、全国猪犬大会への出場犬の訓練ならば、イノシシとの「攻防」と「止め芸」さえ極めれば十分であるし、大会も大方は訓練所で行われるので、場所に慣れるためにも訓練所での訓練が一番である。大会で上位を占めるのは、訓練所での訓練に慣れた犬が多い。



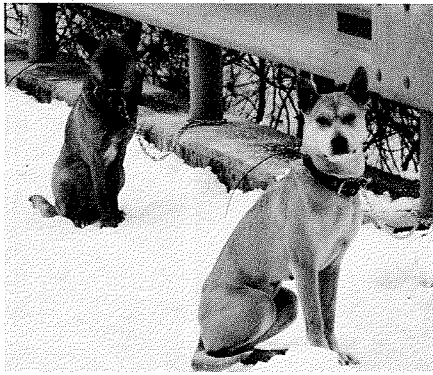
山梨の猟場にて

二代目「ミス号」(左)と「ケン号」(「ミス号」の子)



将来、ビーグル大会のように、実猟の場で行われるようになれば、実猟犬でも入賞のチャンスがあるだろうと思うのだが。実猟犬は実猟の場で、大会出場犬は訓練所で、それぞれの目的に沿って訓練(実戦)を繰り返すことが、その道での一番芸を持つ犬を作る近道ではないかと考えている。

実猟犬の芸は、山での荒猪が相手であり、ベテラン犬ならその危険も十分経験済みで、攻防もあくまで注意深く慎重であり、イノシシとの間合いも心得ている。また、攻防の場も険しい岩場であったり、ブッシュの中なので、「牛若丸」のようにはいかない。  
また「猪犬」は、犬語でこそ完



「クルミ号」(左)と「チヒロ号」

全に実力を出しきれないのである。それゆえ、時間や頭数の制限がある猪犬大会では、なかなか良い成績は残せない。

一方、1頭で大猪を止める訓練をしている訓練所で仕込まれた犬は、そのまま芸を極めさえすれば、大会優勝にもつながる。大会は、審査員は1頭で見事に大猪を止める「攻防芸」を見て優劣を決める。大会での危険度も、山の荒猪相手とは全く違っていている。大会に出場する何十頭もの犬の、受傷や死亡の確率を見てもわかると思う。

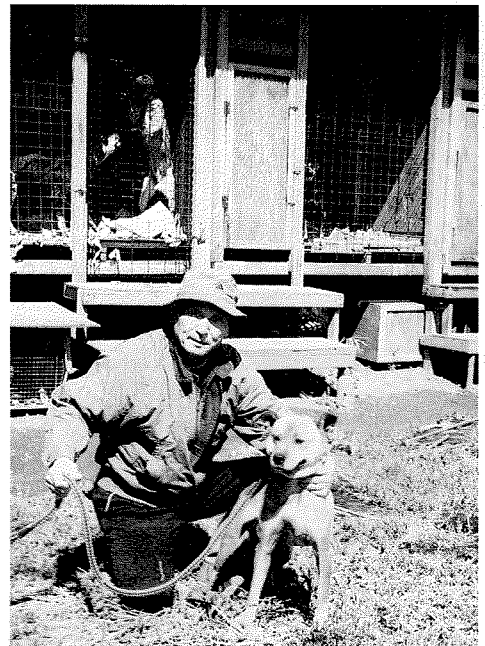
さらに、柵の中にいるのはイノシシだけで、被害を受けて困るものは何もない。それゆえ、競って「大きく強い犬を出す」ということになる。こうなると、当然「咬

み止め」がポイントになり、その見事さが順位を決定する。こうして上位入賞を果たした犬であつても、私の経験から、実猟で十分やれるという保証はないのである。

それでも、上位入賞犬ともなれば、猪猟の要である「止め芸」を極めており、2猟期も使役すれば一流芸になるはずである。並みの素質であれば、実猟でも大会でも「一番犬」とか「一級品」にはなれないはずである。

実猟と訓練所の比較になつてしまつたが、私が言いたいことは、「訓練所の芸をもつて、実猟犬の芸と論ずるべきではない」ということである。あくまでも、訓練所の芸は訓練所内のものであり、そのままでは実猟に使えないということであり、第一、初心者などは、訓練所での芸を見て、「実猟でも通用する一流芸だ」と勘違いしてしまいかねない。

私のように失敗を重ねることなく、遠回りすることなく、決して迷わず、「実猟での一流芸」の猟犬にたどり着いてほしいと思う。全てを承知での訓練所での訓練ならば、それを生かす術もわかっているであろうから、有効だと思う。かく言う私も、現実に「猟犬」



平成17年。「ブル号」のツルもできた

を目的に30頭ほどの犬を飼育しているが、いつそのこと訓練所に預けて…と考えることもある。そのほうが手っ取り早く、それで猪猟の決め手になる「止め芸」が完成するのであれば安上がりで、私自身も体力的に楽ではないか…と思うからだ。

狩猟界の先達は、競って訓練所を作り、そこで愛犬の芸を磨き、一流の猟犬作りを目指し、猟犬界の芸を底上げしてきた。このことは紛れもない事実で、果たした役割も大きかった。猪犬大会を見るにつけ、猟犬芸の向上と、競い合う猟犬を見る楽しみからも、訓練所はなくてはならない「道場」である。

柔道や剣道なら、訓練の場も実戦(大会)の場も同じであるが、猟犬の芸は、極めるのは道場訓練所であつても、実行するのは山野である。このことをきちんと理解することが大切である。

誤解しないでいただきたい。私は、実猟で一流芸を見せる犬が「猪犬大会」では勝てないとか、訓練所で鍛えた犬が「実猟」では使えないと言っているのではない。両方の犬の不足分を補ってさえやれば、双方とも立派に相通ずる「名犬」になることも事実である。このことは、経験された人でなければ、なかなか理解されにくいことかも知れないが、肝に銘じておいてほしい。(つづく)